

『すべてのいのちを守るため』Ⅱ ～コロナ時代を生きる信仰～

カトリック京都司教
パウロ大塚喜直

■はじめに

2020年3月から始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によるパンデミックの終息を祈りながら、感染防止と社会生活の両立を模索する日々が続いています。自粛生活を経験した多くの人は、目標をもち計画を立てて営んでいた生活のリズムが大幅に変化し、そのためネガティブな気分になった一方で、時間が経過する中で、何か心の変化を感じたと思います。たとえそれを言葉にしなくても、自分を見つめ、自分の生きがいや、人生の意味について問いかけていたのではないのでしょうか。信徒の皆さんはミサが中止という事態に戸惑いながらも、各自の信仰生活について振り返る時間をもつことができたのではないのでしょうか。わたしたちキリスト者は、コロナ禍による現実を信仰で受けとめ、『すべてのいのちを守るため』（教皇フランシスコ 2019 訪日テーマ）の行動を続けながら、コロナ時代を生きる信仰について、その根本から見つめ、深めたいと思います^①。

1. 神と静かに語りあう

わたしたちは日々の務めを誠実に果たしながらも、繰り返される日常に気を取られ、心の奥にある霊的な渇きに自ら向き合うことがなかなかできません。そこでコロナ禍にあっても、静かな時をもち、神と語りあう時間を作りましょう。「わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう。神にわたしの救いはある。神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは決して動揺しない」（詩 62・2-3）。沈黙について、マザー・テレサは次のように語っています。「神は沈黙の友です。わたしたちは神を見つけなければなりません、騒音や興奮の中に見いだすことはできません。・・・大切なのは、わたしたちが何を言うかではなく、神がわたしたちに何を言われるか、神がわたしたちをとおして何を言われるかなのです」^②。

信仰を深める一歩は、自らが救いを必要とする者であることを知ることです。人は、自分で自分の渇きを満たすことはできません。まして、自分を救うこともできません。今の生き方でいいのだろうか、自分の心の奥に問いかけてみましょう。「神よ、わたしを究め、わたしの心を知ってください。わたしを試し、悩みを知ってください。御覧ください わたしの内に迷いの道があるかどうかを。どうか、わたしをとこしえの道に導いてください」（詩 139・23-24）。

2. なぜ怖がるのか、まだ信じないのか

昨年3月、教皇フランシスコはパンデミックにおびえるわたしたちに、イエスが嵐を鎮める時に弟子たちを叱責されたことば、「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」（マルコ 4・40）を黙想するように招かれました。神への信頼がなければ、わたしたちは恐れと不安に翻弄されてしまいます。嵐の中、イエスが湖上を歩いてこられたときの物語では、ペトロが「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」（マタイ 14・28）と頼みます。こ

の時ペトロは、主に水の上を歩くことのできる特別な力を求めたわけではありません。イエスの力を信じたのです。

しかし、舟から降りて水の上を歩き始めた次の瞬間、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけます。まるでコロナ禍にあってパニックになり、主イエスから目を離してしまうわたしたちのようです。でもよく考えてみると、キリスト者が神の救いの力を信じて生きていること自体、実は水の上を歩いているような驚くべき日常の奇跡なのです。コロナ禍におびえるのではなく、キリストによって、キリストとともに、キリストのうちに生きるための、主への信頼を忘れてはならないのです。「あなたの道を主にまかせよ。主に信頼せよ」(詩37・5)。わたしたちは、主の計らいを信じるのです。

3. コロナ時代に生きる意味を問う

2011年3月11日の東日本大震災から、今年10年目を迎えます。多くの人々が犠牲になり、被災された人の苦しみは今も続いています。近年、地震・台風・豪雨被害が多発し、自然災害とはいえ、人命も財産も一瞬にして失う体験をすると、だれもが、運命ではかたづけられない、不条理な出来事の意味について問いかけたくくなります。このコロナ禍も、コロナ時代と呼ばれるような人類史の一大転機です。神がいるなら、人類を襲う恐ろしいことがなぜ起こるのか、神はなぜそのようなことをお許しになるのかと、だれもが疑問に思います。

聖書は、イスラエルの民がたどった歴史を救いの歴史として語ります。天地の創造主である神が始めた救いの歴史には神の計画があり、神の計画には理由があると教えます。そして、神の民に襲いかかった数々の苦難の出来事は、神が民に回心の機会を与え、神を真剣に求めさせるためのものであったと解釈します。イエスは「毒麦のたとえ」(マタイ13・24-30参照)を語り、だれも神の計画の全貌を最後まで知ることはできず、ゆえに神の計画を妨害してはならないと教えます。たとえ不条理と思えるような事柄の中にも、神の秘められた思いが隠されているからです。今のコロナ禍の意味を安易に結論づけることは禁物ですが、この時代に居合わせた意味を、信仰の目で問いかけることは重要だと思えます。主は、嵐の中でわたしたちに話しかけます。目覚めて大切なことに気づくようにと。

4. 苦難を通してキリストの受難に与る

教皇ベネディクト十六世は、苦しみは人生の一部であり、神だけが、苦しみの源である悪と罪の力を取り除き、いやしを与える希望を生み出すことができると言われます^③。教皇は、東日本大震災で被災した7歳のエレナという少女から、どうしてこんなに怖い思いをしなければならないのかと質問されて、わたしも分からないが、次の3つのことを知ってほしいと答えられました。第一は、神はそばにいてくださるということ。たとえ答えが見つからず、悲しみのうちにあっても、神は皆さんのそばにいます。第二は、全世界の多くの人が支援を行っていること。第三は、いつの日か、この苦しみが空しく、無駄ではなかったことが分かり、苦しみの向こうにいつくしみと愛の計画があることを知るでしょうと。

パウロは、その生涯に耐え難いほどの数々の苦難に遭いながらも、苦難を生き、苦難の中で神からの慰めを見出した自らの体験をもとに、苦難にある人を慰めることができると言います(IIコリント1・3-4参照)。なぜなら、苦難が個人的なものではなく、自分のうちにいるキリストが味わう苦難と見なしたからです。このコロナ禍にあっても、人類の中でキリスト自身が苦しんで

おられるのです。わたしたちも、互いの祈りの中で、苦しむ多くの人とつながり、キリストの受難に与り、苦難に耐え抜く力（Ⅱコリント 1・6 参照）をいただきましょう。

5. 受ける秘跡より生きる秘跡へ

ミサ中止という試練の時を経験し、わたしたちはどのような意味で、ご聖体によって養われているのかを深く考えます。イエスは最後の晩餐のとき聖体の秘跡を制定し、「これを私の記念として行いなさい」（Ⅰコリント 11・24）と命じられました。弟子たちの足を洗った後、「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。私があなたがたにしたとおり、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」（ヨハネ 13・14-15）と命じられました。「記念として行う」という第一の命令は典礼とかかわり、「互いに足を洗う」という第二の命令は、愛の実行とかかわっています。マザー・テレサは、日に2回聖体拝領すると言われました。1回目は朝のミサで頂き、2回目は日中出会う人の中のイエスを頂くと。まさに彼女にとって聖体の秘跡は隣人愛の実践と固く結びつき、それを誠実に生きる人でした。

典礼、特にミサ（感謝の祭儀）は、キリスト教生活全体の源泉であり、頂点であると言われます^④。わたしたちの日常は、この源泉と頂点の間を過ごす時間と言えます。隣人愛を実践するという、秘跡の恵みを生きる時間です。250年間潜伏したキリシタンは、7つの秘跡のうち、洗礼以外の秘跡を受けることができなくても、祈りと愛の実践によって、迫害の中で信仰を見事に継承しました。ミサ中止という経験を通して、信者が教会に集うという目に見える教会活動とともに、神と人との親しい交わりを生きたいという望みが、教会共同体を築き上げるのだということを学びましょう。そうすれば、教皇が言われる、社会の中での「野戦病院」としての教会の役割を果たせるようになるのだと思います。

6. 希望と喜びをもって

人は将来に希望を持つことではじめて、今の時を意味あることとして受けとめ、意欲的に生きることができます。明日を信じることで、今日を生き抜くのです。コロナ感染の完全な終息が見えない状況で、神の計らいを信じる、希望の徳について考えましょう。人は苦しみの意味をすぐに掴むことはできません。苦しみを体験する人自身が、神に問いかけながら、時間をかけて苦しみの意義を見出していくのです。苦しみが始まった時点で、あるいはその最中でも、いつか必ず神からの慰めと生きる力が与えられると信じるのが、キリスト者の希望です。そして、苦しみを乗り越えるたびに、キリスト者の信仰は強くなっていきます。

希望の徳は、人間の行動を活気づけるさまざまな希望を吸収し、失望から守り、見捨てられた状態の中でわたしたちを支えてくれます^⑤。キリストは「わたしにつながっていなさい」（ヨハネ 15・4）と呼びかけ、ご自分の喜びでわたしたちの喜びを満たすと約束してくださっています（同 15・11 参照）。だから、パウロは自らの苦難の体験をもとに、あえて「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」（Ⅰテサロニケ 5・16-18）と人々に薦めることができたのです。信仰による喜びは、苦難や悲しみが消えさることではありません。神とのつながりに安堵する喜びです。コロナ禍におびえるのではなく、わたしたちもキリストから約束されている、苦難の中でも喜べる力を掘り起こし、働かせたいと思います。

7. 神の御心に適った悲しみ

パウロは、二つの悲しみがあると言います。「神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします」(II コリント 7・10)。悲しみや苦しみの体験から人が回心に至り、自己中心的な生き方から神が望まれる方向へ歩み出すならば、それは神の御心に適った悲しみであり、救いの喜びをもたらしてくれます。そうではなく、苦難を受け入れることを拒み、不平のみを語るなら、苦難は苦難のままに終わり、人を出口のない苦しみに追いやり、生涯に悔いを残す世の悲しみとなり、永遠のいのちをもたらさずしてはしません。コロナ禍も、神の視点から見れば、きっと未知の祝福の入り口となるに違いありません。

パウロは度重なる苦難に出会っても、「四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」(同 4・8-9) と言うことができました。ヘブライ書も同様にわたしたちを勇気づけてくれます。「およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです」(ヘブライ 12・11)。

8. 新しい生活様式

教皇フランシスコの考えの基本は、「あらゆるものはつながっている」という視点です。コロナ禍にあってこそ、個人も、あらゆる共同体も、教皇が呼びかけるエコロジカルな回心を深め、ライフスタイルと日々の行動を見直し、次世代のために美の種を蒔くという創造主から託された使命を重く受け止めなければなりません。教皇は呼びかけます。「主は十字架からわたしたちに問いただしておられます。これからの生活を考え直すようにと、わたしたちを必要とする人々に目を向けるようにと、わたしたちの中で生きている恵みを深め、感謝をもって受け入れ、生かすようにと」(*30 頁)。新しい生活様式(ニュー・ノーマル)ですから、以前と同様の生活水準を求めることはできないでしょう。コロナ時代は、単に感染を予防する生活ではなく、より質素で人間らしく生きる勇気が求められます(*57 頁)。個々人の生活の中において、金銭のみならず、時間、食事、衣服、住居、余暇等において、もう一度本当に必要なものが何かを確認してみましよう。イエスは、明日のための心配は無用であり、わたしたちに何が必要であるかを知っておられる御父への信頼を教えました(マタイ 6・32-34 参照)。贅沢をせず、無駄のない生活をするので、こころ豊かに生きるために、何が最も大切なのかをよく考え、それを選び取るようにしまし

9. 希望と信仰と愛の抗体を持つ

キリスト者は信仰によって、今の生活に意味を、人生に目的を、世界の歴史に方向付けを見出すことができます。生きることの希望の根拠が、この世界を超えたところにあるからです。しかも、信仰はこの世界で他者のために生きるように、社会を福音化する努力を促します。したがって、どんな困難に出あっても、現実を受け入れ、最終的には悪からも、死からも解放されるというキリストの約束を信じ、愛の力で社会のさまざまな課題を克服していくのです。

教皇は言われます。「コロナ感染で、人類が全員、同じ船に乗り合わせているということに気づ

きました。皆、弱く混乱し、しかし同時に、一人ひとりが大切にかけがえのない存在であり、皆が一つになるよう招かれ、互いの慰めを必要としています。この船の上に、わたしたちは皆一緒にいるのです」(*25 頁)。だから、わたしたちは「万事が益となるように」(ローマ 8・28)、ともに生きる地球人となるのです。その課題は、人類家族全体が一つになり、持続可能で全人的な発展を追求することであり、そのために教皇は、「希望と信仰と愛の抗体」を持つ人になろうと呼びかけます(*56 頁)。

10. 正義と愛と連帯の必須の抗体

感染源という発想から、感染者を犯人探しのように特定したがる風潮があります。それは、人々の間に伝播する不安や恐怖により、偏見や差別が広がっていくという危険です。すべてのいのちを守るための行動は、何よりも社会の中での連帯と思いやりを必要としています。パンデミック以前を取り戻すのではなく、これまで以上に人類が連帯を示し、もっとも傷つきやすい人を中心にした社会を築いていくのです。教皇は「主の受難をともにすることは、必ず兄弟姉妹の受難に寄り添うこと」だと言われます(*53 頁)。そして、世界各地の難民のように、以前から見捨てられた状態のまま緊急事態にある人々が、コロナでいっそう困難で危険な境遇に追いやられていることを忘れてはならないと訴えられます。そのためにわたしたちが持つべき抗体を、「正義と愛と連帯の必須の抗体」(*57 頁)と名付けられます。

わたしたちは、他者の苦しみを自分のこととして苦しむことのできる力を持っています。休業や自粛の中で助け合う人たちが、わたしたちの周りにたくさんいます。自分や自国だけの安全や安心にこだわるエゴイズムを排し、すべての人と協力することが必要です。皆が手を取り合って、痛みを分かち合い、弱い立場の人に寄り添い、助け合い、譲り合いながら、新しい生活様式を受け入れ、ともに生きていきたいと思えます。コロナ時代の霊性は、ともに住むことです。

11. 愛の炎を燃え上がらせてください

わたしたちキリスト者は、コロナ禍にあって、この異常な状態から逃避するための信仰を求めるものではありません。コロナ時代に居合わせたからこそ、真の隣人愛を実践し、全人類のいのちを守るための新しい生活様式を模索する努力を続けるのです。こうして、コロナ時代を徹底的に生き抜くことによって、昔も今も変わらない、時代を超えた信仰の神秘に触れ、個々の信仰を深めていくことができるのです。

パウロは、テモテにこう言います。「あなたに与えられている神の賜物を、再び燃えさせたように勧めます。神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです」(IIテモテ 1・6-7)。わたしの救いと人類の救いはつながっています。聖霊を通して、わたしたちは、すべての人の救いのためにできる自分の使命と役割を見出すことができるのです。「神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されます。だから、平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか」(ローマ 14・17-19)。このために、わたしたちは聖霊を受けたのです。

12. 悲しむ人の慰め、母マリア

イエスの十字架のもとに、母マリアが立っていました。イエスが十字架の苦しみを人びとの救いのために耐え忍ばれたように、マリアもその生涯を通して苦しみと痛みを抱え、神の救いの業に参加されました。それは、「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」(ルカ 2・35) というシメオンの預言の実現でした。コロナ禍にある人類の中で、苦しんでくださるキリストとともにおられるマリアに向かって、わたしたちの願いをとどけましょう。「神の母、わたしたちの母マリア、全世界が苦しみと不安に襲われているこの過酷な日々の中で、あなたのご保護により頼み、助けを求めます。新型コロナウイルスの世界的大流行のただ中にあるわたしたちに、あわれみの目を注いでください。悩み苦しむ者の慰めであるマリア、苦しむあなたのすべての子らを抱きしめてください。神が全能のみ手を差し伸べ、この恐ろしい感染症の大流行からわたしたちを救ってください。アーメン」(*74-79頁)。

2021年1月1日 神の母聖マリアの祭日

✠パウロ 大塚喜直

① 2013年信仰年の年頭書簡で取りあげた「12の信仰のセンス」を参照。1 人格的センス、2 発見するセンス、3 認識するセンス、4 キリスト論的センス、5 秘跡的センス、6 実践的センス、7 救済的センス、8 統合的センス、9 批判的センス、10 共同体的センス、11 聖霊的センス、12 マリア的センス。

参照：教皇フランシスコ、『パンデミック後の選択』、(カトリック中央協議会、2020)

注(*頁)は、この本からの引用・参照箇所。

② 参照：片柳弘史、「聖なる者となりなさい マザー・テレサの生き方」、ドンボスコ社、2002)

③ 参照：教皇ベネディクト十六世、回勅「希望による救い」35~40.

④ 参照：典礼憲章 10.

⑤ 参照：カトリック教会のカテキズム、1817~1821.